

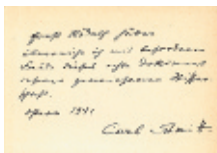


Collection

第1回

貴重書・コレクション紹介

Collection no.1



▲ドイツの政治学者・公法学者であるカール・シュミット (Carl Schmitt 1888~1985)の直筆サイン入り資料も含まれています。



名古屋図書館

エルンスト・ルドルフ・フーバーコレクション

請求記号 NW7
2,160タイトル(全2,373冊)

日本が国の近代化を進めた明治時代、日本の法学者たちは、欧米諸国の法制度を模範にして、日本の古い慣わし、儒教などの教えも一部採り入れつつ、法典編纂事業を進めました。その中心となる憲法や民法は、ドイツから強い影響を受けて制定されました。戦後、新憲法が成立しましたが、日本の法学は現在もドイツの法学から多くを学んでいます。

このたび、フーバーコレクションが、愛知大学名古屋図書館にやってきました。このコレクションを遺したエルンスト・ルドルフ・フーバー(Ernst Rudolf Huber 1903~1990)は、20世紀のドイツの激動の歴史を生き抜いた公法学者であり、初期にはナチス体制に積極的に関わり、その法制定にも携わったこともありましたが、戦後は静かな学究生活を送り、後半生を『1789年以後のドイツ憲法史』の著述に捧げました。これは、フランス革命からワイマール国家の崩壊までのドイツの憲法の変遷を、全8巻総頁数7700頁に及ぶ空前絶後のスケールで著したものです。この記念碑的大作を書くために収集された文献が、コレクションの基になっており、そこには18世紀末から20世紀にわたる重要なドイツの法学(特に憲法学)の文献がほぼ網羅されています(全体では、2000点を超える規模を誇ります)。これほどの点数の文献が、保存のよい状態で揃っているのは珍しく、その貴重な価値が国にも認められ、補助金を受けて本学に設置されることになりました。

このフーバー・コレクションは、現在、公開に向けて準備中です。公開が決まりましたら、図書館ホームページ等でお知らせいたします。

Collection no.2



▲源頼朝の出した文書。右のほうに頼朝のサイン(花押)があります。



豊橋図書館

島津家文書

請求記号 M219:To46
リール数 306リール(2012年度末現在)

薩摩(鹿児島)の島津家は、広くその名を知られた名門で、関ヶ原の戦いの際に、島津義弘が敵陣をつきぬけて帰国したことや、幕末・維新の変革の中で、島津斉彬や久光が活躍したなどは有名です。そもそも島津家は12世紀からの歴史を持つ家で、鎌倉時代や室町時代には薩摩・大隅の守護として活動し、戦国時代には大きく勢力を拡大しました。その後秀吉には屈服したものの、本領は確保して、江戸時代には70万石余の大名家として続き、明治維新の際には主導的立場にありました。12世紀から19世紀までの700年の間、薩摩やその周辺の支配者として続いたわけで、稀有の歴史を持つ武家だといえることができます。

長い歴史を誇る島津家は、家伝の古文書を大切に守り続けてきました。頼朝・尊氏・信長・秀吉・家康・秀忠・家光といった著名な武将の文書をはじめとして、多数の文書が今に残されており、中世・近世の古文書研究の絶好の素材となり得ます。そして、こうした現物の古文書だけでなく、島津家に進められた家の歴史の研究に関わる成果が大量に残されていることも大きな特色です。江戸後期に作られた文書集成の「旧記雑録」、明治期に幕末・維新期の島津家の事績と史料をまとめた「島津家国事執筆史料」などがこれにあたります。

質量ともに充実した文書群ですが、その現物にふれるのは容易ではありません。ただありがたいことに、膨大な史料を撮影したマイクロフィルムがあり、うれしいことに、文部科学省の助成を受け入手し配架することができました(現在も継続購入中)。さまざまな可能性を秘めた史料群なので、多くの方々から利用していただきたいと願っています。